

【卒論報告】



沖縄市のライブハウスとその特質 —沖縄振興特別推進交付金における地域活性化と観光誘致—



澤田 聖也（音楽文化デザイン学科音楽研究専修 平成 28 年度卒業、東京藝術大学大学院在籍）

沖縄市のライブハウスは本土・沖縄・アメリカ的要素を併せ持つ一種独特な空間である。沖縄市にある2つの地域のライブハウスの共通点・相違点を考察した。

沖縄市と嘉手納基地の関係

沖縄市は沖縄本島中部に位置する都市で、1945年から存在する嘉手納基地を中心に、現在に至るまで基地経済に依存し続けている。メインストリート(ゲート通り)には英語表記の看板や米軍人相手に商売する店などが立ち並んでいることから、その景観は異国情趣を感じさせる(写真1、写真2)¹⁾。沖縄市ではこうした沖縄文化とアメリカ文化が融合した文化を「チャンプルー文化」と呼び、当市の魅力の1つに数えている。

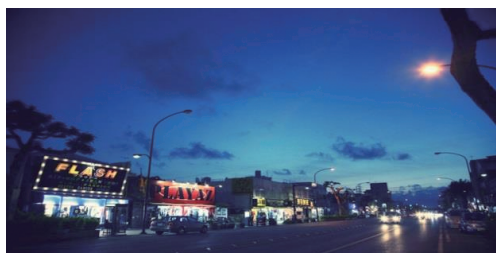


写真1 ゲート通りの景観

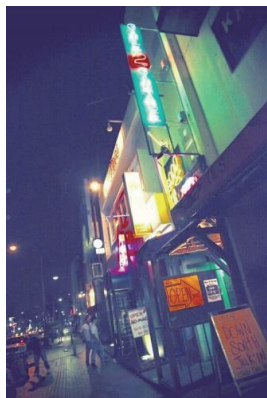


写真2 ゲート通り

当地には、米軍人相手の店がいくつか点在している。これは1948年に越来村^{ごえき りん}の初代村長の城間盛善による「これだけの軍人軍属もいるから商売をして、それで街づくりをしよう」という着想から、中心街をメインに米軍人対象の店舗設置計画が立案された。復帰前、嘉手納基地は朝鮮戦争やベトナム戦争の中継地点として利用され、多くの米軍人が駐留していた。そのため、多くの軍関係者は基地周辺にある米軍人相手の店を娯楽の場として利用していた。この状況は沖縄の本土復帰後も続き、現在も週末の夜になるとメインストリートや店内は米軍人で溢れている。

本土復帰前のライブハウス

沖縄県は1972年までアメリカの支配下にあった。そのため、現在よりもアメリカ文化が広く深く浸透し、米軍基地の周りには軍関係者のニーズに沿った店が立ち並んでいた。その中でも「クラブ」や「キャバレー」、「バー」がライブの演奏空間であった。(「ライブハウス」という言葉は和製英語で、1970年代半ばから日本で普及し始めた)。

沖縄人はこうした場所で米軍人相手に演奏していた。特に、1950年代と1960年代は朝鮮戦争とベトナム戦争の勃発により、戦争景気がもたらされ、沖縄市も第二次大戦後で最も栄えていた。その一方で、いつ死ぬかわからない恐怖を持つ精神不安定な米軍人や、麻薬を摂取し幻覚や幻聴にみまわれる米軍人が多く嘉手納基地に集まっていた。そのため、演奏中に突然暴れ出す人やビール瓶や灰皿を投げ出す人がいたり、こうした異常な空間の中で沖縄人は彼らに合わせた音楽を演奏していた(写真3)。しかし、こうした環境下においても、ミュージシャンの月給は一般的に給料が高いと言われている銀行員よりも極めて高かったため、彼らは生活費を稼ぐためにも危険を承知で演奏をし続けなければならなかった。



写真3 米軍人による乱闘の様子

(沖縄市役所『沖縄市戦後文化資料展示室 ヒストリート』p.24)

ライブハウスの音楽

復帰前のライブハウスで演奏されていたのは主に欧米のロック・ミュージックであった。当時は、その時

流行していたVenturesやDeep Purpleといったバンドの作品が演奏されていた。沖縄の人々はこれらの音楽をKSBK(琉球ラジオチャンネル)と呼ばれる米軍人向けの英語放送局から吸収し、米軍人相手に演奏した。私は、復帰前に演奏活動していた宮永英一に当時の音楽活動について話を伺うことができた。

宮永英一：

「1日4回のステージを45分、その1ステージで演奏できる曲がほしい7、8曲ぐらい。だから1日で30曲ぐらいはやってたね。1週間やっても尽きないぐらいのレパートリーが必要。しかも、1か月でもらえる休みは2回だけだから1か月で約750回以上演奏していたことになる」。

このように、米軍人の需要が極めて高かったことから、毎日のように演奏する状況が本土復帰後も余韻を残す形で続いた。しかし、ベトナム戦争終結による軍人の減少、また、復帰に伴う固定相場制から変動相場制への移行、それに加え、1971年の「ドルショック」や1985年の「プラザ合意」等によって徐々に円高になり、米軍人は以前のように浪費できなくなったことから、復帰前よりもライブハウスに足を運ばなくなった。

こうした事情から、本土復帰後は米軍人相手だけでなく沖縄人相手のライブハウスも登場するようになった。このような経緯から、現在の沖縄市のライブハウスは「米軍人相手のライブハウス」と「沖縄人相手のライブハウス」に大別され、それぞれのライブハウスが客層に応じた音楽、システム等を導入している。例えば、歌詞に関して言うならば、沖縄人相手のライブハウスでは沖縄民謡や昭和民謡、フォーク、ポップスなどの日本語歌詞が音楽提供される一方で、米軍人相手のライブハウスは復帰前と変わらず欧米の原語によるロックを提供している。

ライブハウスとオフリミッツ

復帰後のライブハウスは前述した2つに分けられ、米軍人相手のライブハウスが「コザゲート通り」、沖縄人相手のライブハウスが「中の町中通り」に属している。私は、この2つの地域にあるライブハウスの共通点と相違点を本論で考察したのだが、ここでは、その中でも特記すべき「運営事情」について述べたい。

沖縄では、軍関係者による事件・事故等が発生した際に、米軍基地から「オフリミッツ」³が発令される。この発令は沖縄市で米軍人相手に経営しているお店にとって赤字経営へとつながることを意味する。例えば、2016年5月19日に発覚した日本女性死体遺棄事件

により、米軍人は「基地外での飲酒の禁止・1ヶ月の夜間外出禁止」となった。これに対して基地周辺で米軍人相手に商売している経営者は「事件があって米兵は店内にも1人もいない。こんな静かな通りは見たことがない」、「明日から休業。事件はすごくショックで、あってはいけないことだが、店を開けても意味がない。生活も厳しくなる」⁴と述べている。このように、ライブハウス経営はオフリミッツによって極端に左右される。

オフリミッツは1953年から現在まで使用され続け、米軍人相手のライブハウスに大きな損害をもたらしてきた。復帰前のオフリミッツは、米軍に対するデモや抗議集会があるたびに、基地に依存している沖縄市へ経済制裁の意味合いで発令されていたが、現代のオフリミッツは、米軍関係者による事件・事故が発生した時に、米軍の自粛を意味して使われる。しかし、復帰後も（経済制裁の意図は無くとも）結果的に米軍人相手のライブハウスに経済的ダメージを与えている。これは今も基地に経済的に依存し続けるからこそクリアできない問題なのである。

おわりに

現在の沖縄市のライブハウスは米軍人と沖縄人を意識した作りになっている。特に米軍人相手のライブハウスの音楽や営業時間、経営状態などは、良くも悪くも直接・間接に米軍基地の影響によって左右されることが明瞭に見てとれた。今後は、今回調査した地域を含め、他の地域のライブハウスも徹底的に調査することで、一面的でなく、ライブハウス全般の状況も把握していきたい。

1 BEAMS「BEAMS EYE on OKINAWA NOW」
<http://www.beams.co.jp/special/okinawa2/>
2017年2月20日 アクセス

2 越来村の名称は①～⑤のように変遷している。

①越来村(1908年～1945年)②胡差市(1945年～1946年)③越来村(1946年～1956年)④コザ市(1956年～1974年)⑤沖縄市(1974年～現在)

3 米軍基地が米軍人・軍属・家族に民間地域へ出入りすることを禁止する命令。

4 沖縄タイムス
<http://www.okinawatimes.co.jp/article.php?id=170599>
2016年5月30日 アクセス

参考文献

- * 新城俊昭『教養講座琉球・沖縄史』、編集工房東洋企画、2015（未所蔵）TAC 所蔵あり：津田塾大、東京外国語大
- * 沖縄国際大学文学部社会科学部石原ゼミナール編『戦後コザにおける民衆生活と音楽文化』、榕樹社、1994 請求記号●C59-318
- * 沖縄県ロック協会『オキナワンロック50周年記念誌』、沖縄県ロック協会、2014（未所蔵）
- * 沖縄市役所総務課『沖縄市戦後文化資料展示室ヒストリート』、沖縄市役所、2011（未所蔵）
- * 高橋美樹『沖縄ポピュラー音楽史—知名定男の史的研究・楽曲分析を通して』、ひつじ書房、2010 請求記号●J118-034

●「さわだせいや この4年間、とても充実した日々を過ごしました。先生や友達に厚い感謝の念を込めまして。ありがとうございました。」